

令和七年度 入学試験問題

国語（文系）

一五〇点満点

《配点は、一般選抜学生募集要項に記載のとおり。》

（注意）

- 一、問題冊子および解答冊子は監督者の指示があるまで開かないこと。
- 二、問題冊子は表紙のほかに11ページある。
- 三、問題は全部で3題ある（1ページから11ページ）。
- 四、試験開始後、解答冊子の表紙所定欄に学部名・受験番号・氏名をはっきり記入すること。表紙には、これら以外のことを書いてはならない。
- 五、解答は、すべて解答冊子の指定された箇所に入すること。
- 六、解答に関係のないことを書いた答案は無効にすることがある。
- 七、解答冊子は、どのページも切り離してはならない。
- 八、問題冊子は持ち帰ってもよいが、解答冊子は持ち帰ってはならない。

次の文を読んで、後の問に答えよ。(五〇点)

われわれの周囲は、^{はげ}烈しい都市化の傾向にある。東京だけではない。大阪、名古屋だけではない。京都、奈良、金沢のような古都も、また、名の知られぬ町や村さえも……。

「都市化」とは何であろうか。

もとより、都市は、現代に始まるものではない。今日知られているもつとも古い都市は、七〇〇〇年前の新石器時代のトルコの都市であるという。人々は土製の家に住み、天井から出入りする。しかし、すでに工場があり、市場がある。交換経済がかなり広範囲に行なわれていたと推定されている。

ギリシャ人は、都市国家「ポリス」群を形成し、かれらは誇らかに「ポリスに住まないものは人間ではない」と考えていた。ルネサンスのイタリアの諸都市は「都市の空気は自由を作る」といわれ、人間解放の場と考えられていた。

われわれは、都市を政治的自由と結びつけて考える伝統をもっていない。それにしても、「町は自由でいい」と田舎の人たちには考えつづけられていた。長い間、われわれの観念にある「都市^{まち}」は、文明の利器に囲まれた文化的な生活であり、洗練した趣味であり、そうして地縁的な、また血縁的なさまざまなクビキからおのれを解放し、一人の人間として生きるチャンスを探めうる場であった。都市は、そのようなものとして、強大な吸引力を発揮しつづけてきた。「あそこへゆけば、ないものはない」、「あそこへゆけばチャンスが待っている」、「美しい恋人にめぐりあえるかも知れない」等々。

しかし、都市は、いまもなお、⁽¹⁾そのように「かわいらしいもの」であろうか。

まず、都市は、人間にとって自然に対する新しい関係である。

自然を^と摂り込み、その荒涼とした面を和らげ、いわば庭園化し、そのような、飼いならした自然の中におさまっている都市もある。京都や金沢のような街がそうである。そのような特別な街でなくても、自然の枠の中におさまっている街はまだ少ない。われわれにとって長らく街とはその程度のものであった。蚊やり火のかすかな匂い、打ち水をした道からたちのぼる

冷氣、それらにまじるかすかな虫の音、時に蛙かえるの声……。

記憶は次第に薄らぎつつあるが、たしかに戦前の日本の都市は、今日のように常軌を逸したものではなかった。東京や大阪の街は、四通八達した運河に貫かれ、岸へには柳の老樹が深く影を落としていた。機械的なものは町の点景にすぎなかった。

しかし、今日の大都市はもはやそうではない。自然は外に放り出され、コンクリートの立体的な、機械の内部のような街が今日の近代的な大都市である。自然は、そここにとり残された水たまりのように残り、また、もとより、空はなお春の雲を浮かべ、秋の雲を渡らせてゆく。しかし、人間の生活は、自然を閉め出し、勘定に入れないで営まれてゆく。

⁽²⁾都市化とは、まず、このように自然を「疎外」し、自然から「疎外」された生活である。それは、人間にとってまったく新しい体験である。人間の長い歴史、あるいは人間以前の生物の長い歴史の中で、いつも大地は身近にあり、水は、雲は、微風は、身近にあつた。植物や動物たちは身近にあつた。自然がわれわれを包んでいた。それらのものを与える「大地の感覚」はわれわれの精神を正常に保つ上で、微妙な働きをしているものではないだろうか。牢獄ろうごくにあるのと同じくらい自然から距へだてられることは、何か、目にみえない影響を心のはたらきに及ぼさないだろうか。

具体的に大地を踏みしめて生きることと、みずからの正常さに対するゆるぎない信頼、いわば、⁽³⁾自己の存在に対して「大地の感覚」をもつて生きることとの間に、つながりはないのであるか。われわれの意識がこのような環境、いわば、交響楽における基底音のように、はつきりとは聞きとれないが、たえず鳴りつづけているものに、どれほど深く影響されているか、誰も言うことができないだろう。

しかも、都市的な生活は、自然からだけ疎外された生活ではない。それはまた他の人間との関係も変えてゆく。大家族、隣近所、それらはたしかにわずらわしい、うるさい存在である。長らくわれわれは、それらにとり囲まれて、息づまる思いで生きてきた。今日でもなお、それらがなくなつたわけではない。

しかし、行きずりの人までふくめて、他人は不必要なのだろうか。

「東京は、他人の眼がなくなつて、ほんとうにさばさばした町ですわ」とひとは言う。

たしかにそうである。お祭ごとの寄付金、町内会、そうして、いつも口さがない近所の老人たち、それらは、地方の生活を今もなお、やり切れないものになっている。恋人と手をつないで歩くには、ひとの話題にのぼるのを必ず覚悟しなければならぬのが、今日でも地方都市の多くの実状なのだ。

職場、それと家庭をつなぐ交通機関、夫婦中心の家庭、少数の友人、それからいくつかのゆきつけの店、好みにかなったレクリエーションの行き先。それだけ、そうしてそれだけしかもたないことは、大変すっきりした人生を約束しているかにみえる。少なくとも地方都市からはるかに望み見る時はそうなのだ。

しかし、たとえば、ある友人は、東京に移り住んだ体験をこのように語る。

「久しぶりに京都へ行って、市電に乗った。するとね、不思議なんだ。乗客のあいだに何か交感がある。赤の他人のはずなのに感情の交流がある。石ころと違ったものとして、触れ合っている。東京では、そうじゃない。電車のほうも石ころを運んでいるつもり、こちらのほうも、運ばれているあいだは、死んだも同然。『存在すること』を止めて^やいる。京都に住んでいた時は、ああいう、低音の交感など気づきもしなかったがねえ」。

(4)
筆者も同感である。

ゆきずりの他人すら、大きな力をひとに及ぼしているのだ。祭の日のざわめきの中で、おのずと表情はほころび、心はなごむ。あご紐^{ひも}をかけた警官隊がいならぶあいだを歩かねばならぬ時、頬はこわばり、心はひきしまる。人の表情の、心に及ぼす力は大きい。石の表情をした人たちに囲まれ、職場に運ばれ、家庭に戻るあいだ「人間の壁」に囲まれていると感じるとき、その影響するところ、みずからも「心の表情」を失ってゆきがちなのは、大いにありうることである。行きずりの人間からの疎外感も、徐々ではあるが、大きな影響を与えるものといわねばならぬだろう。

(中井久夫「現代社会に生きること」(一九六四年)より。一部改変)

注(＊)

「都市の空気は自由を作る」＝通常は中世自治都市を言い表したドイツのことわざとして知られる。

問一 傍線部(1)について、都市が「かわいらしいもの」であるとはどういうことか、説明せよ。

問二 傍線部(2)はどういうことか、説明せよ。

問三 傍線部(3)はどういうことか、説明せよ。

問四 傍線部(4)「筆者も同感である」とあるが、筆者は友人の言葉を受けとめてどのように考えているか、説明せよ。

問五 人間と自然、および他の人間との関係について、筆者は「都市化」がどのような影響を及ぼすと考えているか、本文全体を踏まえて説明せよ。

次の文を読んで、後の問に答えよ。(五〇点)

読書とは、たつたひとりで作品と向きあう行為である。

音楽、映画、展示、舞台、スポーツ、ゲームなどは大勢のひとと同じ時間、同じ場所で感動を分かち合うことができるけれど、読書はそうはいかない。いつでもどこでも基本ひとりで。図書室だの、喫茶店だの、ひとが集まっている場所でも、見渡すと誰しもそれぞれの本に向き合っている。つまり読書はひとを孤独にさせる道具だということ。そこに己の身を切るような、かつこよさがある。

いまもこの世界の片隅に、本を読んでいるひとがいる。それはほかの鑑賞で見られるような熱狂を生み出さない。読書の情動は、はかなくゆれるたつた一本のろうそくの炎にすぎないのだ。でも目をとじれば、この世界のあちこちで、鼓動のように、だれかの胸のともしびが明滅しているのが見える。それが至るところで起こっていて、⁽¹⁾地球はいつも決して死なない蛍の群れに覆われているみたいだ。

そういえば去年、書評家の渡辺祐真さんとのトークイベントの場で「物語ってどういうものの？」という質問をされて、どうしようかと困ったことがある。わたしは重度のめんどくさがり屋で、わけても物事の意味や価値を考えるのが苦手なのだ。

そんな状態でかろうじて言えたのは、優れた物語というのが作品のはらむ傷や矛盾までをふくめて非常に有機的・合理的につくられていて、これは事実にはとうてい太刀打ちできないということだ。また物語のなかの人間模様には倫理的な上下の序列がないということも心に留めておく必要がある。正しいことを言うひとがその小説で一番偉いということもないし、悪人が底辺に置かれるということもない。⁽²⁾むしろ人間は倫理をはぎとった状態で対等に扱われる。そうした人間関係は、ときに滑稽なまでに無防備で、またときに残酷で救いがないこともあるけれど、その正直さゆえに、物語はわたしたちが本当に直視すべき事柄があるかを教えてくれる。さらに小説家は出来事を組み立てる力、人間の感情を描き出す力、社会の諸関係を見えるようにする力、そしてなにより言葉を読者に届ける力を持っている。国境を越え、時空を超えて遺憾なく発揮されるその

技術を楽しむのも物語の醍醐味^{だいごみ}だろう。

と、こんなことを喋^{しゃべ}ったのだけれど、さらに「物語を読むことの効用」について質問されて言葉につまった。そもそもわたしにとつて、読書の効用は楽しいということにつきる。軽い意味においても、重い意味においても。でも、そう答えると「その楽しさって具体的になんなの？」と掘り下げられてしまう。⁽³⁾ここであつかり相手の質問に乗つてはいけない。乗つたが最後、それが読書の効用であるかのように、ことの次第が入れかわつてしまうから。なんでもいい、たとえば「自分の文脈を離れて他人の目線を生きられること」だの「大勢のひとの思惑がうずまく状況を冷静に俯瞰^{ふかん}できること」だのと口にすれば、それが一人歩きするだろう。でも違う。そうじゃない。もしも効用がなくなつたとしても読むのだ。本を読むことの底に、現状への抵抗があるかぎり。要するに読書の楽しさは、書かれた内容にもまして読む行為そのものにある。

とはいえ考えというのはあつちこつちを向いているから、これよりほかの回答がわたしのなかに見当たらないわけではない。それをひとつ語るとすれば、新渡戸稲造『武士道』に引用されていた、ジョン・ラスキン『野の橄欖^{かんらん}の王冠』の一節と出会つたときのことかと思ひ浮かぶ。

戦争はあらゆる技術の基礎であると私の言う時、それは同時に人間のあらゆる高き徳と能力の基礎であることを意味しているのである。この発見は私にとりて頗^{すこぶ}る奇異であり、かつ頗^{おそ}る怖ろしいのであるが、しかしそれがまったく否定し難き事実であることを私は知つた。簡単に言えば、すべての偉大なる国民は、彼らの言葉の真理と思想の力とを戦争において学んだこと、戦争によつて涵養^{かんよう}せられ平和によつて浪費せられたこと、戦争によつて教えられ平和によつて欺かれたこと、戦争によつて訓練せられ平和によつて裏切られたこと、要するに戦争の中に生まれ平和の中に死んだのであることを、私は見いだしたのである。

(新渡戸稲造『武士道』矢内原忠雄訳、岩波書店)

右の一節に触れたのはたしか高三の、ちょうど湾岸戦争が起こり、文壇のあちこちから「戦争の前で言葉／文学は無力か」と

いつた議論が聞こえていた時期だった。この議論の底流には、アドルノが「文化批判と社会」で述べた「アウシュヴィッツ以後、詩を書くことは野蛮である」という有名な命題がある。

わたしも湾岸戦争の映像を見ながら考えてみたけれど、納得のいく回答が浮かばない。そんなとき、人間の言葉の真理と思想の力は戦争のなかに生まれ平和のなかに死んでゆく、というラスキンの言葉を読み、その直感的洞察に自分が立ち返るべき地平を見たような気がして、もしかすると「言葉／文学は無力か」をこのタイミングで自省してみせる態度の裏には、世界を遠巻きにながめる特権階級的な傲慢さがひそんでいるのかもしれない、と我に返った。

⁽⁵⁾言葉や文学が無力であるわけがない。だってそれは種を蒔いたり、苗を植えたりすることと同じ種類の、生命をはぐくむ営みなのだから。むしろ戦争が起こっているいまこそ、蒔かないといけないし、植えないといけないし、育てないといけない。たとえ嘲笑され、批判されたとしても。蒔いても刈られ、実を結ぶ見込みがないからといって、種を蒔かない者がいるだろうか。平和ばかりでない。いかなる概念も勝手に空から降ってきて実を結ぶようなことは起こらない。それを成立させるためには、人間の意志でもって種を蒔いて育てるよりほかないのだ。そんなふうに高校生のわたしは思った。そしていまでもまったく同じように思っている。

ラスキンは、名誉のための決闘という考え方がまだ世間に息づいていたヴィクトリア朝の人物である。私闘が禁じられ、暴力が国家に独占された社会形態も知らなければ、世界大戦やホロコーストの惨禍を見ることがなかった。核の脅威となると、その光景は想像の埒外だろう。そんな彼の語る戦争が、今日わたしたちの思い描くそれと質的に異なるものであることは明らかだ。もしも未来の世界を覗くことができたなら、もつと違う物言いをした可能性もある。だが、たとえそうだとしてみてもなお、いまここに残された彼の言葉は、これからも折々の文脈に採まれては、わたしのなかで生きのびるに違いない。

(小津夜景『ロゴスと巻貝』より)

注(＊)

ジョン・ラスキン||イギリスの社会・美術批評家(一八一九～一九〇〇)。

アドルノ||テオドール・W・アドルノ。ドイツの哲学者・批評家(一九〇三～一九六九)。

問一 傍線部(1)はどうか、説明せよ。

問二 傍線部(2)はどうか、説明せよ。

問三 傍線部(3)のように筆者が言うのはなぜか、説明せよ。

問四 傍線部(4)はどうか、説明せよ。

問五 傍線部(5)はどうか、説明せよ。

三

次の文は、『義経記』の一節である。源義経(判官殿)は、兄頼朝(兵衛佐)の討手を逃れて陸奥へ下向するにあたり、北の方と一緒に連れて行こうとするが、まず北の方の気持ちを確かめるため、その住まいを訪問した。これを読んで、後の問に答えよ。(五〇点)

判官殿をば中門の廊に隠し奉りて、弁慶妻戸の辺に立ち寄りて、「もの申さん」と言ひければ、「何処より」と答ふ。堀川の方より」と申しければ、妻戸を開けて見ければ、弁慶にてぞありける。

日頃は人伝にこそ承りしに、あまりの嬉しさに、北の御方御簾の際に立ち寄りて、「人は何処にぞ」と問ひ給ふ。堀川におはしますが、明日陸奥へ御下り候ふが、『申せ』との仰せの候ひつるは、『日頃の御約束は、いかなる有り様をしても具足し参らせんと申して候ひしかども、道々どもみな塞がれて候ふなれば、人をさへ具足して憂き目を見せ参らせん事、いたはしく思ひ参らせ候へば、義経先に下りて、もしながらへて候はば、秋の頃は必ず御迎ひを参らせ候ふべし。それまで御心長く待たせおはしませ』とこそ仰せ候ひつれ」と申しければ、「この度だにも具して下り給はで、何故に迎ひを給はるべき。下り着き給はざらん先に、老少不定の習ひなれば、ともかくもなりたらば、とてもかくても逃れざりけるもの故に、など具して下らざりけん」と後悔し給ふとも、甲斐あらじ。御志ありし程は、四国西国の波の上までも、具足せられしぞかし。さればいつしか変はる心のうらめしさよ。大物の浦とかやより都へ帰されしその後は、思ひ絶えたる言の葉を、また廻り来て、とかく慰め給ひしかば、心弱くも打ち解けて、二度憂き言の葉にかりぬるこそ悲しけれ。申すに付けて、いかにと覚ゆれども、我いかにもなりなば、後の世までも罪深き事と聞く程に申すなり。過ぎぬる夏の頃より心乱れて苦しかりしを、ただならずと人の申すを、月日に添へて身も苦しくなりまされば、その隠れあるまし。六波羅へも聞こえなば、兵衛佐は情けなき人と聞けば、捕りも下されんずらん。ただ今憂き名を流さん事こそ悲しけれ。何と言ひても、人の心の強きなれば、力なし」と、打ち解け涙も堰き敢へざりければ、武蔵坊も涙を催しける。

灯火の影にて、常に住み給へる御障子の程を見れば、御手と覚えて、かくぞあそばしける。

(5)

つらからば我もこころの変はれかしなど憂き人の恋しかるらんとありけるを、弁慶見奉りて、今の御言葉は、忘れ参らせ給はざりけるとあはれにて、急ぎ判官殿にかく申せば、「さらば」とおはしまして、「御心短き御恨みかな。義経も御迎ひに参りて候」とて、ふと入り給ひければ、夢の心地して、訪ふにつらさの涙堰き敢へず。

〔義経記〕より。一部省略

注(*)

弁慶Ⅱ武蔵坊弁慶。義経の家来。

堀川Ⅱ京都の地名。当時、義経の屋敷があつた場所。

四国西国の波の上までも、具足せられしぞかしⅡこれより以前、義経は北の方らを伴つて船で四国に逃れようとしたが、暴風に遭つて引き返し、吉野山に潜伏した。その際、北の方は都に帰されていた。

大物の浦Ⅱ現在の兵庫県尼崎市の地名。義経一行が四国を目指して船出した場所。

六波羅Ⅱ京都の地名。当時、頼朝の代官がいた場所。

問一 傍線部(1)を、適宜ことばを補いつつ、現代語訳せよ。

問二 傍線部(2)はどのようなことか、説明せよ。

問三 傍線部(3)はどのようなことか、説明せよ。

問四 傍線部(4)はどうか、説明せよ。

問五 傍線部(5)を、適宜ことばを補いつつ、現代語訳せよ。

問題は、このページで終わりである。